

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	カルマール 良子
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 西山 修 副主査：（鳴門教育大学教授） 田村 隆宏 委 員：（鳴門教育大学教授） 久我 直人 委 員：（岡山大学教授） 片山 美香 委 員：（岡山大学准教授） 馬場 訓子
3. 論文題目	
乳児の自発性に基づく四つ這い獲得の運動発達過程	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 カルマール良子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和8年7月4日（土）10時00分～10時40分 場所：Zoomによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 第1章 研究の範囲と位置付け 第1節 研究の背景と乳児の自発性に基づく四つ這い獲得の重要性 第2節 用語の統一と倫理的配慮 第3節 研究目的と内容構成 第2章 乳児期における運動発達とその実態 第1節 乳児の四つ這い獲得過程に関する事例検討 第2節 乳児のはいはい動作の分類と四つ這い獲得状況 第3節 生後1年間における育児用品の使用実態とその特徴 第4節 乳児の四つ這い活動との関連に着目した座位獲得過程の検討 第5節 乳児の寝返り及び座位獲得開始時期と自発的な遊びとの関係 第3章 乳児の自発性に基づく保育プログラムの提案 第1節 乳児の自発性に基づく運動発達を促す保育内容の検証 第2節 乳児の自発性に基づく運動発達を促す保育プログラムの開発 第3節 乳児の自発性に基づく運動発達を促す保育プログラムの実施と検証 第4章 研究の総括と今後の展望 第1節 乳児の運動発達過程の現状と支援の意義 第2節 保育プログラムの開発と乳児の自発性に基づく四つ這い獲得過程 第3節 今後の課題と展望 引用文献 資料	

近年、育児用品の普及や乳児の自由な身体活動が制約されやすい育児環境の広がりに伴い、乳児が床面で匍匐運動を経験する機会の減少が指摘されている。こうした状況の中、乳児が匍匐運動を基盤として姿勢や移動能力を発達させ、歩行獲得へと至る過程の再検討が求められる。なかでも四つ這いは、姿勢制御と移動能力を統合しながら歩行へと至る重要な発達過程であり、自ら環境へ働きかける基盤となる運動である。しかし、我が国において四つ這いを中心とした匍匐運動の実態や育児環境との関連は十分に明らかにされていない。

そこで本研究は、乳児の自発性に基づく四つ這い獲得の運動発達過程を明らかにするとともに、自発性を尊重した運動発達支援の在り方を検討することを目的とした。その理論的基盤として、ハンガリーの小児科医 Emmi Pikler (1902–1984) が提唱した「自発的な運動の尊重」に着目し、Pikler-Lóczy method の理念と実践を踏まえて研究を進めた。

第1章では、乳児期の姿勢運動発達に関する先行研究を整理し、四つ這いの発達の意義について検討した。四つ這いは、上肢と下肢の協調運動、体幹の安定性、左右交互運動など、多面的な発達を支える重要な運動であり、歩行獲得に至る過程で重要な意味をもつことを明らかにした。また、Pikler-Lóczy method の理論的特徴を整理し、乳児が自ら発達を進めるための準備段階に応じて姿勢や移動能力を獲得する意義について考察した。さらに、保育・育児現場で「はいはい」と総称されている移動様式について検討し、「ずり這い」「腹這い」「四つ這い」「高這い」など異なる発達の特徴をもつ運動として整理した。そのうえで、これらを区別して捉える必要性を指摘し、日本の保育実践への応用可能性を考察した。

第2章では、乳児の四つ這い獲得過程と育児環境との関連を明らかにするため、事例検討と保護者アンケート調査を実施し、乳児期の運動発達過程、育児用品の使用状況、保護者の発達観を調査した。その結果、歩行器や乳児用椅子などの長期間使用が、四つ這い経験の減少や継続期間の短縮と関連していることが示された。また、本研究では「はいはい」をずり這い・四つ這い・高這いに分類して分析した結果、四つ這いを獲得しない乳児も存在することが明らかとなった。さらに、運動発達過程の分析から、ずり這いや四つ這いを経て座位を獲得する群と、座位を先行して獲得する群が確認された。加えて、寝返りと座位の獲得順序に着目した分析から、発達順序には多様性が認められ、寝返りより早く座位を獲得した座位先行群では寝返り開始が遅く、早期からの姿勢援助との関連が示唆された。特に座位先行群では四つ這い経験が少なく、乳児期初期の匍匐姿勢での遊び経験や保護者による姿勢援助が運動発達過程に影響している可能性が示された。また、保護者の発達観や援助行動が、運動発達の順序や四つ這い経験に影響する可能性が示唆された。

第3章では、第2章の知見を踏まえ、自発性を尊重する保育プログラムを開発・実践し、その有効性を検証した。プログラムでは、乳児を受動的に座らせたり立たせたりするのではなく、乳児自身が動きながら姿勢や移動能力を獲得していく過程を保障することを重視した。具体的には、十分な床面空間の確保、自由に身体を動かせる環境構成、保育者による過度な姿勢援助の抑制を実践した。その結果、乳児は発達を進めるための準備段階に応じて寝返り、ずり這い、四つ這いを繰り返し経験しながら移動能力を高め、自らの力で座位へ到達した。これは、乳児の発達を先取りして座位を促すのではなく、発達過程を保障しながら待つことの重要性を示すものであった。また、保育者の発達理解も深まり、乳児の自由な全身活動を支える援助への変化が確認された。これらの結果は、自発的な運動経験の積み重ねが四つ這い獲得過程を促すことを示した。

第4章では、第1章から第3章までの研究成果を総括し、研究の到達点および今後の課題と展望を示した。特に、乳児の運動発達を歩行獲得という到達点のみで捉えるのではなく、四つ這いを含む自発的な運動経験を通して姿勢や移動能力を獲得していく過程そのものの重要性を指摘した。また、母子健康手帳に示される発達評価項目や保育所保育指針における発達の捉え方との関連から、発達の到達や獲得時期のみではなく、乳児が自ら姿勢や移動能力を獲得していく過程そのものを支える視点の重要性について考察した。最後により大規模な実態調査や家庭育児を対象とした支援プログラムの開発、多職種連携による発達支援体制の構築、保育者研修や保護者啓発活動への応用など、乳児の発達を支える今後の課題と展望を示した。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、4編の査読付き学術論文として、全国学会誌等である『発育発達研究』（単著、日本発育発達学会誌 2017）、『発育発達研究』（第一著者、日本発育発達学会誌 2020）、『日本幼少児健康教育学会誌』（第一著者、日本幼少児健康教育学会誌 2022）、及び『日本幼少児健康教育学会誌』（第一著者、日本幼少児健康教育学会誌 2024）から成る。これらの研究成果と内容につき審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下のとおりである。

（1）研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、乳児の自発性に基づく四つ這い獲得過程に焦点を当て、乳児の発達を支える保育・子育て支援の在り方を提案することを研究目的としている。論文構成は、本目的に沿って先行研究を踏まえ、乳児の運動発達の実態及び育児環境との関連に関する量的・質的分析を行い、保育プログラムの開発・実施・検証を通して、保育・子育て支援の在り方を論考する流れとなっている。したがって、研究目的に整合した妥当な論文構成であると認められる。

（2）先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

先行研究の概観では、Pikler 理論、保育所保育、母子保健施策等の関連資料から、乳児の自発性に基づく運動発達について広域的確に整理し、考察している。また、発達実態調査及び運動発達過程の分析においても、関連領域の文献を適切に参照している。実態調査及び観察研究に使用した資料も適切に取り扱われており、倫理的配慮にも問題はない。よって、研究資料の質・量ともに学位論文として十分な水準にあると判断できる。

（3）分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析と考察においては総じて、主観的・恣意的な記述を排除し、科学的かつ論理的な記述がなされている。分析では、統計的手法による実態把握に加え、発達群別の比較分析や四つ這い獲得過程に関する観察データの分析を行っている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を踏まえた論考が行われている。論の運び方は明快であり、得られた結果から納得のいく合理的な結論を導いている。

（4）教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

少子化や育児環境の変化が進む今日、保育及び子育て支援の充実は重要な課題である。本論文は、乳児の自発性に基づく運動発達過程に着目し、四つ這い獲得過程に焦点化して分析した点に特色がある。特に、従来「はいはい」として一括的に扱われてきた移動運動を、自発的発達の視点から分類し、四つ這い獲得過程の特徴として再構成した点は独創的である。また、Pikler 理論の観点から考察し、保育プログラムの開発・実施・検証を行ったことは教育実践学研究として高く評価できる。よって、本論文は教育実践学の観点から独創性に富み、保育実践及び保護者支援に寄与するものと期待される。

（5）学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

本論文は、乳児の自発性に基づく運動発達過程の実態及び四つ這い獲得過程の特徴を明らかにし、発達を支える保育実践に重要な知見を提供している。また、現代の育児環境が運動発達に及ぼす影響を示したことは、保育者による保護者支援や発達理解の促進に活用できる成果である。さらに、本研究に基づく保育プログラムは実践場面や養成校での活用が期待される。以上により本論文は、学校教育実践へ貢献する成果が認められ、学校教育学の発展に寄与する論文といえる。

3. 審査経過

以上により、本審査委員会は、カルマール良子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。